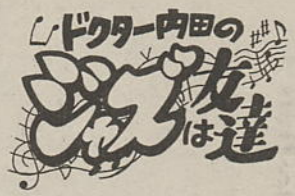


この所やりきれない計報 (ふほ) が相次いだ。ジャズを通してお近づきになった方ばかりである。

お礼言えず心残り

医を本業とするジャズ評論の先輩、東海大学精神科の牧田芳雄教授(牧芳雄はペンネームである)。かつて慶応の助教授時代、毎朝NHKテレ



△(29)▽

ビでパイプをくゆらせながら国際的な視野に立った司会をされて好評だったが、あの粋でスマートな雰囲気は生まれついでのものだ。一年ほど前、レコード評で「この作品で一番感心したのは、内田さんのライナーノートである」とあり、こんな事書いて頂いて良いのかなあとすっかりとぎまぎしてしまっただが、は

お礼を言ったものかと迷い続けて果たさぬままに亡くなられて何とも心残りであった。アメリカ詩専攻の慶応大学文学部教授鍵谷幸信さん。西脇順三郎氏の高弟を誇りにした彼とは、親友の詩人清水俊彦さんを受けて、よくコンサートに行き、酒席をともにした。もっとも酒をたしなまぬ鍵谷さんは、日(る)のユニ

クな視点からの舌鋒(ほつ)鋭い評論がまるでうそみたいな物静かな表情で、僕らのジャズ談議に耳を傾けておられたものだが、まだ五十代なかばの若さで逝くなんて、口惜しい感じが言いがたい。

病をおしての案内

小説家野坂昭如さんのお兄さんで、新潟在住の野坂恒如さんは、パイプ愛好家としても有名だが、常に大所高所からの歯に衣(きぬ)着せない文章は、「ジャズ界の御意見番」と呼ぶにふさわしく、最初はどんなにこわい人かと思っていたが、お会いすれば心くほりの優しい方。先年新潟まで足をのぼした時は、雨の中の市内を足早に歩きまわり、いくつものジャズスポットを

元気にご案内頂いた。その時すでに病を患っておられたかもしれないのに心配すらも見せなかったその精神力に、今はただただ申し訳なく思っばかりなのだ。

悔しい相次ぐ計報… 尽きないジャズ談議

サイモン、E・オルビーさらにはH・ビンターの前衛劇に至るまで幅広く挑戦し続けている意欲的な男。僕は公演の都度上京し、終わったあと必ず徹底的に飲み明かすのがならわしになっている。

感受性鋭い色川氏

そんな時、行動をともにし



ジャズの見識も深かった色川武大さん

驚くべき博識とこだわりがないでドクタージャズと異名をとる内田修さんの出版記念パーティーが、六本木のビッドインであった。夜の十二時か(ひ)かれてと言われながらも、新しいジャズに対しての柔軟な感受性は見事なものだ、その夜聴いたまだほとんど無名だったラルトの中川ぶれだった。外国に出ている人をぞいて、八木正生、峰厚介、辛島文雄、中村誠一、坂田明、山本剛、日野元彦、渡辺文男、小川俊彦、原田勇、原田忠幸、渡辺香津美、鈴木勲、大友義雄、村上宗

「麻雀放浪記」の阿佐田哲也のペンネームでも知られる同い年の色川武大さんを紹介してくれたのは、幼なじみの俳優杉浦直樹君だ。年に二度に定評のある彼は、昔に二度は舞台に立ち、古典からN・

て下さるのが演出家の福田陽一郎さんや、女優の若林映子さん、そして色川武大さんで、この方たちのジャズに対する見識は、ただならぬものだ。その色川さんが何の前ぶれもなく飄(ひょう)然とわが家まで訪ねて来られたことがある。「歌は天国ジャズ

昌三が送ってくれた佐藤允彦とのカセットに「これは良い」ともられたと言が、僕に彼らのリサイタルを決意とシャムセツションをやった。ここでは色川さんが、その著作に書いて下さった一文を(紹介して)心からの感謝と惜別を捧(たも)げよう。

高橋知巳、その他まだいろいろな人が居たはずだが、とても覚えきれない。彼らが次々とシャムセツションをやっていく。珍しい組み合わせあり、「ギャラリーエイト」の(名前)を思い出すようなつかしい組み合わせあり、時間を忘れてドガチャ力騒いだ(内田修)